

現代韓国のキリスト教の「死」と葬送儀礼 — 金壽煥枢機卿・姜元龍名誉牧師の事例を中心として —

曹 起虎[※]

はじめに

筆者は、キリスト教における「死」とは、

異教の伝説の中の神の死の物語—一般に死の後に再生が訪れる—と結び付けて考えることが可能である。キリスト教の「死」は、多くの類似の物語の長い歴史のなかで見れば、キリスト教の中心的な物語と位置付けることができる。しかし、それは当時のパレスチナではきわめて常識はずれた物語だったという点を指摘しておかなければならないであろう。〈中略〉「復活」は救世主が降臨した時に起こるものであり、その時には一人の人間ではなく共同体の全員が復活するはずなのである¹。

と述べておきたい。

さらに、以上のような引用文の中で、あらかじめ、1つのキーワードである「復活」という言葉を筆者は念頭におく。筆者は本論文で現代韓国のキリスト教界、即ち旧教のカトリックや新教のプロテスタントの高名な聖職者を1人ずつ事例人物として選定したが、事例人物として選定された金壽煥（キム スホァン、1922-2009）枢機卿（チュギギョン）やプロテスタントの元老である如海（ヨヘ）姜元龍（カン ウォニョン、1917-2006）名誉牧師は、救世主ではない普通の人間であったからである。

一方、池上良正（池上 2006）は、

従来の宗教研究の伝統では、仏教やキリスト教の研究という、どうしても「理念研究」、つまり、さまざまな教典類に記された教えや、開祖・聖人をはじめ著名な宗教的達人、宗教思想家とよばれるような人たちが説いたとされる言葉、書き残した著作などを対象とした研究が多かった。そこでは、多様な教典類の成立年代や系譜を明らかにする文献学的な研究や、教義や思想の紹介や解釈などが中心におかれる²。

と指摘している。

池上は、日本における高名な宗教学者であることは周知の事実である。池上の引用文を考察してみると、これからの「宗教研究」は、「理念的な方法論」ではなくて、なるべく「実態的な研究方法論」が要求されていることがわかる。そこで、筆者が本論文を記述するに当たっては、「実態研究」を志向していきたいということを明らかにする。この「実態研究」とは、1つの民俗学的な研究方法であるとはいえ、既存の「理念研究」とかなり隔たりがあるわけである³。こういう段階で筆者が記している本論文は「主張されている宗教学」ではなく、おそらく「生きた

※神奈川大学日本常民文化研究所特別研究員

れている宗教学」を目指しているといえよう。

21世紀に入ってから、韓国のキリスト教界では数えきれないほどの関係者が永眠（善終）した。そのなかでも、筆者は、前述の2人の高名な指導者における「死」と葬送儀礼を探るため、とりあえず、彼らの成長背景や人生観などをたどってみる。

まず、金壽煥枢機卿は、1922年5月8日（陰暦）大邱広域市で5男3女の末子として生まれた。金壽煥神父は韓国のカトリックの聖職者として、ソウル大教区の教区長（大主教）などを歴任され、韓国人としては初めて「枢機卿」に叙任された。洗礼名は「ステファノ」であり、ローマ教区の「サンペルリチェ ダカンタカントルリチェ チェントチェレ聖堂」の名譽主任司祭職の司祭級枢機卿であった。2009年2月16日老衰により善終した。

姜元龍（カン ウォニョン）名譽牧師は2006年8月17日昼12時5分、老衰でこの世を去った。享年89歳であった。姜牧師は11日午前、江南（カンナム）三星（サンソン）医療院という総合病院で急に倒れ重患者室に移された後、酸素吸入器によって延命処置がなされていた。姜牧師が理事長をしている「平和フォーラム」の関係者によると、姜牧師は最近のひどい蒸し暑さで気力がかなり落ちた状態だったので、8月10日、同医療院に療養のため入院したが、翌日午前、急に昏睡状態に陥ったという。

現代韓国社会は「多宗教社会」であり、各種の宗教者たちが行う儀礼と儀礼的行動、靈魂と墓所などは、学問の系統、地域と家柄、階層などによって異なり、「死」の意識と葬儀をどのように定義するかという問題と緊密に結びついている。それで、筆者は、本論文を通して、金壽煥枢機卿に見るカトリック、姜元龍名譽牧師に見るプロテスタントの「死」の意識と葬儀を順次的に考察してみたい。

これらを考察するにあたっては、現代韓国のキリスト教の中の2つの代表的なカトリックやプロテスタントの「死」と葬送儀礼を記す土台になるようにできるかぎり臨場感のあるように記していきたい。

なお、本稿の写真の説明は文末にまとめて記した。

1 金壽煥枢機卿に見るカトリックの「死」の意識と葬儀

1) 金壽煥枢機卿の「死」の意識

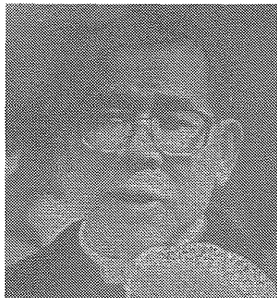
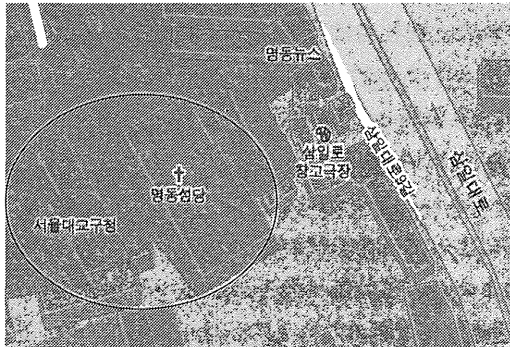


写真 1



写真 2

金壽煥神父の家は代々篤実なカトリックの家柄であり、祖父である金ボヒョンは1866年丙寅迫害の時には忠清南道論山郡ヨンサンという町で官軍に捕えられ殉職している。カトリック迫害で父親を失い遺児として生まれた金壽煥の父親金ヨンソクは迫害から逃れるために故郷を立ち、他の信者たちのように陶磁器を売る商人として全国を放浪した。そのような中で、1895年頃慶尚道漆谷郡に定住し、徐ジュンホァ⁴と結婚した。



地図 1

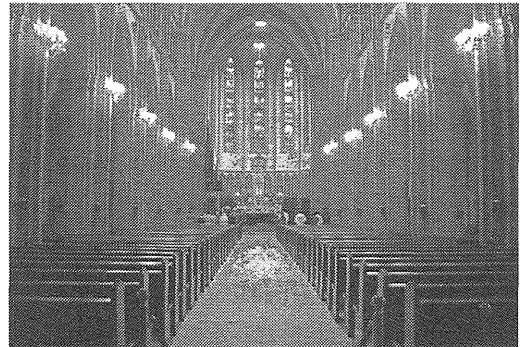


写真 3

金壽煥神父の幼い時の夢は商人になることだった。しかし神学と信仰の影響などでカトリックの聖職者の道を歩むようになった。軍威（クニ）普通学校に通っていた頃、彼と4番目の兄は母親から呼ばれ、将来司祭になるようにという誘いを受け、その道を歩むようになったという。一方、徐ジュンハは放浪癖があった長男を満州まで探しに行き連れ帰ったといい、金壽煥は後日、母親の深い信心と愛情の影響を受けるようになったと告白した。軍威普通学校5年の課程を卒業した金壽煥は、家が大邱に引越すと同時に大邱広域市にある大邱ユスチノ神学校付属初等学校に転校し、卒業後に大邱ユスチノ神学校に進学した。そこを卒業してからはソウル教区の小さな神学校に編入し、さらに学業に励んだ。

1941年4月金壽煥は天主教大邱教区の奨学生として日本の上智大学文学部哲学科に入学して学業を続けた⁵が、日帝からの独立運動に関心を抱くようになった。1944年、日本の学徒兵として強制的に徴収され、日本の士官候補生として東京の南方で訓練を受けた。第2次世界大戦が終わると同時に再び上智大学に復学し、1946年12月に帰国した。ソウル聖信大学校（現カトリック大学校）

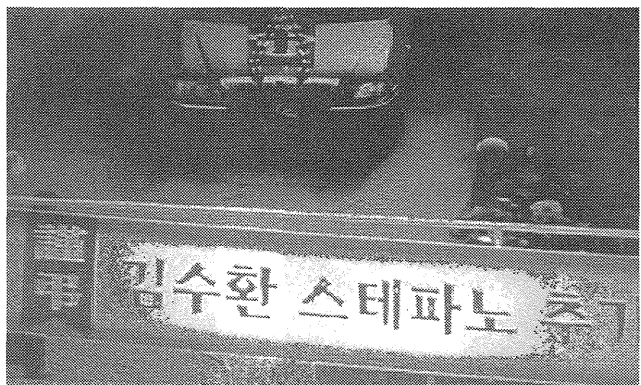


写真 4

に編入し学業を続け、1951年9月15日大邱ケサン洞聖堂で司祭授任式を受けた。

彼は1974年民青学連事件に池（ジ）ハクスン主教が巻き込まれ拘禁されている時、釈放を嘆願するため当時の朴正熙大統領を直接訪ねて面談し、彼の前で政権の独裁を厳しく批判した。しかし、1979年10月26日、朴正熙大統領が暗殺されると直接追悼の辞を朗読したりもした。

この時「人間朴正熙⁶が主の前に立ちました。」と言う表現が話題になった。朴正熙が長期執権の野望を捨て、残りの課題を後任に残しておいたなら、今頃国民の尊敬を受ける国父になったであろうと惜しんでもいた⁷。1987年4月13日護憲措置当時にもミサにおいてこれを撤回すべきと言う要求をし、6月抗戦の時には明洞大聖堂に入ってきたデモ隊を連行するために警官隊が入ろうとすると、「警察が入って来るなら私が一番先頭に立つであろう。その後ろには神父たち、その後ろには修女たちがいるであろう。そしてその後ろに学生たちがいるであろう」と対抗したのも彼だった。1983年、4番目の兄キムドンファン司祭が亡くなると、彼は兄が最後に住んでいた場所を訪ね、そこに一時留まっていたという。

75歳になった1997年、金壽煥は高齢を理由にローマ教皇庁にソウル教区長辞任の意思を伝えたが受け入れられなかった。それ以後彼は再び何度か辞任の意思を表明し、1998年4月19日にはあるアジア特別宗教の集いに参加のために教皇庁を訪れた席で再度意思を表明し、結局教皇ヨハンパウロ2世が1998年5月29日ソウル大教区長と平壤教区長職の辞任を許可した。1998年ソウル大教区長と平壤教区長職兼務を天主教区長の千（チョン）シンソク大主教に譲り渡したが、多くの社会活動に参加して影響を与え、最高齢枢機卿として、また最長在任枢機卿としても名声を高めた。2001年1月26日午前10時半から1時間20分の間、京畿道義王（イオァン）市のソウル拘置所で死刑直前の死刑囚たちを訪れ、ミサを行なったこともあった。2002年天主教の規定により満80歳になって法王選出権を失った。これによって金壽煥は公式業務から引退した。2006年6月22日、韓国に新しい鄭（ジョン）ジンソク枢機卿が誕生したことについて金壽煥は大変良かったと語った。



写真 5-A

金壽煥神父は、2004年の四旬節（Lent）⁸記念講演で、盧武鉉（1946－2009）第16代大統領弾劾事件などで国論が分裂したことを憂慮し、与党に差し控えるように注文した。しかし、咸世雄（ハム セウン）神父から不義な独裁時代に権力者たちがいつもやってきたこともあるが、宗教の壁を越えて、ソウルの東国大仏教大学院の招待特別講演で時局批判に感謝すると述べた。2005年4月、教皇ヨハパウロ2世の善終の後、新教皇を選出する選挙には年齢制限の規定で参加することはできなかったが、ヨゼプラチンゴ枢機卿が法王ベネディクト16世に選出された後、法王即位ミサを2名の枢機卿と共同で主管したこともある。

1969年3月28日、金壽煥は教皇パウロ6世により枢機卿に任命された。1975年6月1日から平壤教区長の代理を兼務した。また1970年にはアジア天主教主教会の構成準備委員長として選出され、1967年以降には韓国代表として6回にわたり世界主教会代議員会議にも参加した。これ以外にも彼は高位聖職者として韓国の宗教ばかりでなく政治・社会・文化など多方面で貢献した業績が認められた。その結果、1974年2月西江大学校で名誉文学博士の学位を受けて以来、アメリカのノートルダム大学、日本の上智大学、韓国の高麗大学、延世大学、台湾フゼンカトリック大学、フィリピンのアテネオ大学などで名誉法学・哲学・人文学博士の学位を受けた。1970年には国民勲章ムグンホァ賞を受けた⁹。



写真5-B

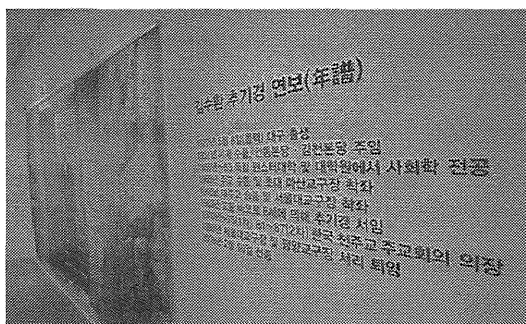


写真5-C

それでは、カトリックの「死」の意識について考察するため『旧約聖書』の詩篇104章の21－33を見る。

若きしはほえてえさを求め、神に食物をもとめる。日が出ると退いて、その穴に寝る。〈中略〉主よ、あなたのみわざはいかに多いことであろう。あなたはこれらをみな智慧をもって造られた。地はあなたの造られたもので満ちている。かしこに大いなる広い海がある。その中に無数のもの、大小の生き物が満ちている。そこに舟が走り、あなたが造られたレビヤタンはそのなかに戯れる。中略〉あなたがみ顔を隠されると、彼らはあわてふためく。あなたが彼らの息を取り去られると、彼らは死んでちに帰る。あなたが霊を送られると、彼らは造られる。あなたは地のおもてを新たにされる。どうか、主の栄光がとこしえにあるように。主がそのみわざを喜ばれるように¹⁰。

当時の人びとは、「死」に臨んでいても、ひたすら神様こそ、あらゆる人間の生と死、そして永生の存在の根拠であると考えていたと推測できる。しかし、「聖書」の他の所では、人間は「土」からの産物であるにとらえられている。『旧約聖書』の創世記2章の4-17をみる。

主なる神が地と天とを作られた時、地にはまだ野の木もなく、また野の草も生えていなかった。主なる神が地に雨を降らせず、また土を耕す人もなかったからである。〈中略〉また主なる神は、見て美しく食べるに良いすべての木を土から生えさせ、更に園の中央に命の木と、善悪を知る木とを生えさせられた。〈中略〉主なる神は人を連れて行ってエデンの園に置き、これを耕させ、これを守らせられた。主なる神はその人に命じて言われた。「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし、善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」¹¹。

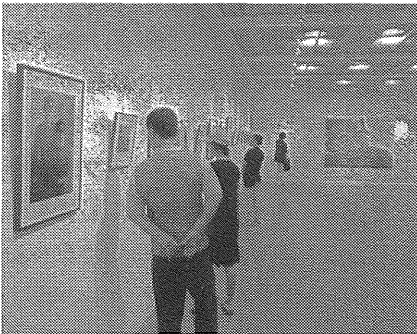


写真5-D



写真5-E

周知のように、以上の引用文だけではなくて、『聖書』全般によると、人間にとって死とは「アダムの子」以来神様からもらった「罰」なのである。そこでは、人間は「土」からの被造物である。さらに『聖書』は、神様の警告を無視するとか従わない人間には、辛く生きなければ

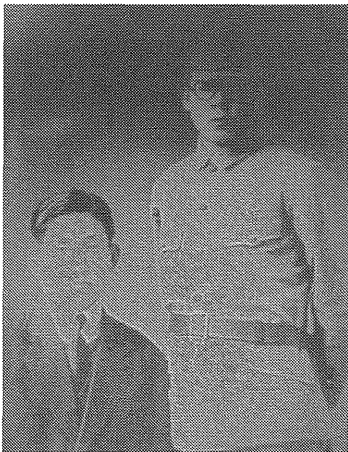


写真6

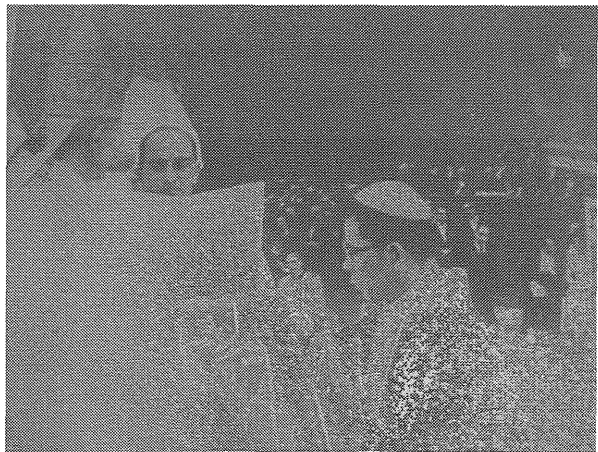


写真7

ならないと強調する。つぎの『聖書』の内容をみてみよう。

更に人に言われた。「あなたが妻の言葉を聞いて、食べるなど、わたしが命じた木から取って食べたので、地はあなたのためにのろわれ、あなたは一生苦しんで地から食べ物を取る。地はあなたのために、いばらとあざみとを生じ、あなたは野の草を食べるであろう。あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る。あなたは土から取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰る。」¹²

とある。

ところで、『旧約聖書』と『新約聖書』における「死」の意識は多少異なるところもあるが、ほぼ同じなので、『新約聖書』に取られている「死」の意識は省略する。

桑田秀延（桑田 昭和43）は、『キリスト教の人生論』を通して、キリスト教では、まず「死」を身体の死と理解し、生物学や医学で取り扱うと考える。したがって、キリスト教における「死」とは、的確には何かということについては医師の結論を重要視するわけである。ところが、新・旧約『聖書』の教える「死」の意識についてはさらに詳しく探らなければならないと思う。『聖書』とキリスト教信仰は、その信仰ゆえに身体の死をも独自の考える。「ヘブル人への手紙」の9章27節では、人間は誰でも一度死ぬように定められていると記されている。これは身体の死を指しているのだろう。桑田秀延の主張によると、この「身体の死」については少なくとも3つの説明が必要であるという。

その1つは、死が生とともに神の支配下にあるということである。次に、人間は造られた存在、または始まりがあり終わりがあるという有限な存在、死への存在であることが教えられている。そしてその3に『聖書』が教えていることは死が刑罰の意味を持っているとする点である¹³。

このように見ると、結局、韓国のカトリックの中で、今まで一番高名な人物としての金壽煥神父もやはり『聖書』のとおり、「土」に帰ったといえよう。言い換えると、たとえ、彼が天国に行ったとカトリック側からのメッセージがあったとしても、信心深い神父金壽煥の「死」の意識は、以上の『聖書』のなかの引用文と同様に土に帰ったといえよう。



写真8

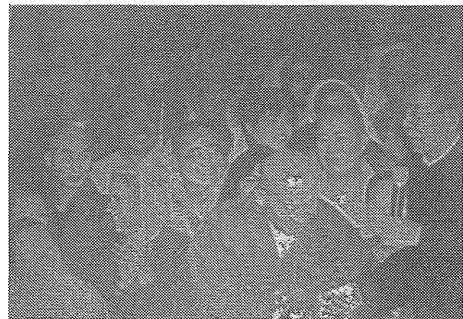


写真9

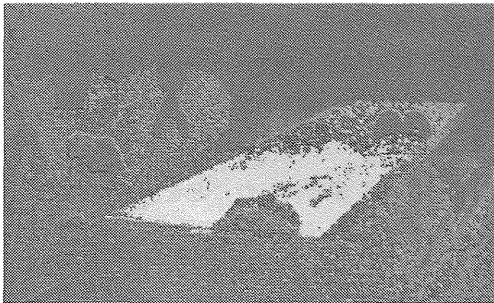


写真10-A



写真10-B

2) 金壽煥枢機卿におけるカトリックの葬儀

金壽煥神父の葬儀は、どのように行なわれたかについて探してみる。

金壽煥枢機卿が善終したのは2月16日であった。金壽煥枢機卿が善終すると、ソウル大教区明洞主教はすぐさま弔鐘を100余回鳴らし、カトリック教会はもちろん全国民に対し「大きな星」が消えた悲しみを知らせた。

ソウル教区はその夜8時30分、明洞聖堂文化館の前で記者会見を開き、枢機卿の哀悼の辞を公式発表した。金枢機卿の他界の情報が発表されると、明洞聖堂の入り口と文化館の前に続々と金枢機卿の生前の姿を収めた写真が展示され、文章がしたためられた旗と謹弔懸垂幕が次々と高く掲げられた。

いうまでもなく、金枢機卿を納める棺と銘旗が聖堂内に設けられた。この日の夜9時40分に交通警察の護衛の中、金枢機卿の死体が病院の救急車に載せられて明洞聖堂の入口に入ってきて、教区司祭8名が金枢機卿の棺を運び聖堂に入ってきた。ソウル大教区の司祭や修道者、信者たちは一斉に低く嗚咽し、胸元で十字を切って故人の平安な安息のための祈りを捧げた。

金枢機卿の臨終の知らせを聞いた全国の信者たちは落ち着いた雰囲気の中、ソウル大教区に準備された公式焼香所を訪れ金枢機卿追悼ミサと慰霊祈願を捧げるなど、哀悼の人波は続いた。



写真11-A

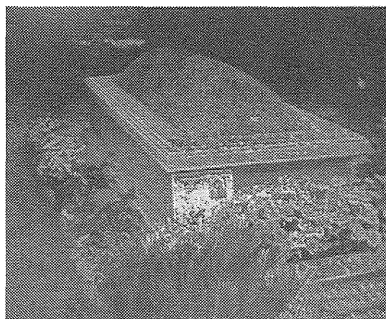


写真11-B

特に、大邱大教区は金枢機卿が司祭職を授かった教区なので、17日午前11時、公式の焼香所を備え、信者たちの弔問を受けた。また葬礼期間の間、毎日午前11時30分と午後3時そして夕方7時、1日3回の追悼ミサを奉獻することとした。そのため、全国の各教区ごとに公式焼香所が設置された。

以上の内容の一部分はカトリックの「平和新聞」の記事を参考にしたことを明らかにしておく。



写真11-C

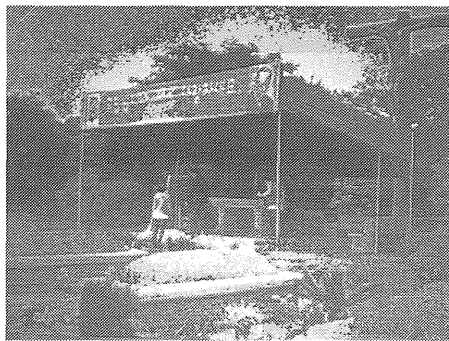


写真11-D

金壽煥枢機卿の告別ミサの順番は以下のとおりであったので、詳しい内容は省略してその式次第だけ記す。



写真12

〔復活時期ではない場合の葬儀ミサ式次第〕

1. 入堂歌：4エステル2, 34.35
2. 本祈祷
3. 第一読書 ヨブ記19, 1.23-7a
4. 応歌：詩篇27, 1.4.7.8b.9a.13-14
5. 第二読書：Iコリント15, 51-57
6. 福音前歌：マタイ25, 34

7. 福音：マタイ25, 31-46
8. 慰霊感謝歌：4エステル2, 34.35

〔復活時の葬儀ミサ式次第〕

1. 入堂歌：1テサロニケ4, 14; I コリント15, 22
2. 本祈祷
3. 第一読書：黙示録21, 1-5a.6b-7
4. 応歌：詩篇122, 1-2.4-5.6-7.8-9
5. 第二読書：I コリント15, 20-24a.25-28もしくは20-23
6. ハレルヤ：ヨハネ6, 40
7. 福音：ヨハネ6, 37-40
8. 慰霊感謝歌：ヨハネ11, 25-26

2 姜元龍名誉牧師に見るプロテスタントの「死」の意識と葬儀

1) 姜元龍名誉牧師の「死」の意識

如海（ヨヘ）姜元龍（カン ウォニョン、1917～2006）名誉牧師は1917年10月30日、咸鏡南道イウォン郡ナンソン面ウォンピョン里で生まれた。儒教的な家風の家で成長し、普通学校在学当時の1931年プロテスタント（改新教）に入教した。父母の反対は強く、特に彼の祖母は大いに悲しんだそうである。

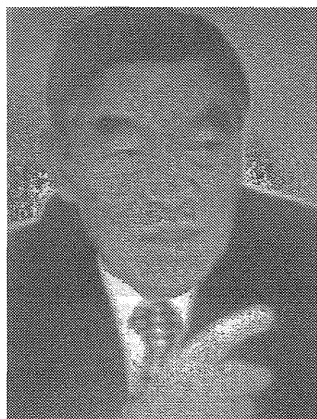


写真13



写真14

故人はプロテスタント内の進歩教団であるキリスト教長老会出身で、1931年キリスト教に入信した後、一生を韓国教会発展と社会民主化運動に貢献してきた人物である。日本の明治学院大学英文学部を卒業した後、韓神大と米国ニューヨークユニオン神学大で学士学位を、1962年カナダのマニトバ大学で神学博士学位を授かった。彼が牧師の按手礼を受けたのは韓神大を卒業した1949年、それ以来キョン洞教会で40余年間牧会活動を率い、今日のキョン洞教会を作った。

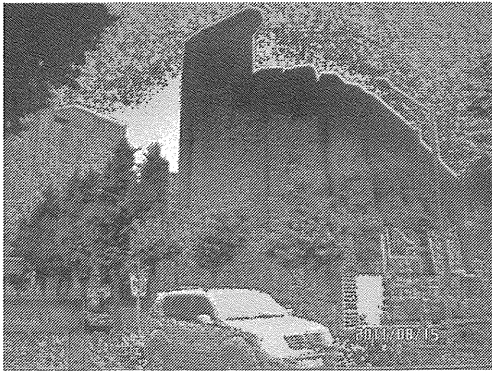


写真15-A

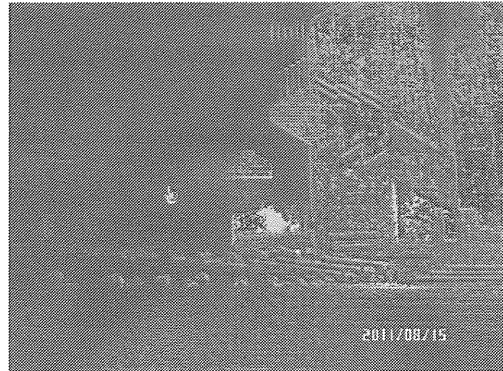
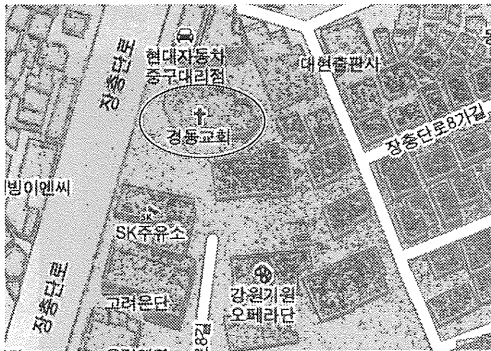


写真15-B

韓国キリスト学生総連盟の成立に携わり、総務と理事長として働き、1963年には「クリスチャンアカデミー（対話文化アカデミーの前身）」を設立し、「宗教間の対話」と「討論文化向上」に大いに寄与した。

特に金泳三・金大中元大統領などが在野活動をしていた頃から彼らと交遊があり、現実の政治に深く関わってきた彼は、去る2000年、韓国の国論統一と周辺強大国などの協力を引き出し、平和統一を早めようという趣旨で社団法人「平和フォーラム」を発足させた。



地図2



写真16

さらに、アジア宗教人平和会議会長、世界宗教人平和会議共同議長、韓国宗教人平和会議会長、ソウルオリンピック組織委員会文化芸術行事推進委員会委員長、放送委員会委員長、統一部統一顧問会議議長、放送改革委員会委員長、失業克服国民運動委員会共同委員長などを歴任するなど、政治・社会・宗教・言論など分野を問わず活発な活動を続けてきた。

『新世代の建設者』、『廢墟の湖』、『自由にさせる真理』、『人生と宗教』、『姜元龍との対話』、『如海姜元龍全集』、『信じる自分と信じない自分』、『怠けていると』、『歴史の丘で』などの著書を残し、国民勲章牡丹章、国民勲章椿章、体育勲章、清龍章、庭野平和賞、萬海賞（平和部門）

などを受賞した。

2) 姜元龍名誉牧師におけるプロテスタントの葬儀

姜元龍牧師に見るプロテスタントの「死」の意識と葬儀は、次のように行なわれた。

遺族としてはキリスト教長老会女信徒会会長である夫人の金ミョンジュ（88）氏をはじめ、1男2女がいる。殯所はソウル大学病院霊安室一号室であった。埋葬地は京畿道麗州郡カナム面タンコク里の南漢江（ナムハンガン）公園墓地であり、出棺予定日は2006年8月21日であった。

それでは、姜元龍牧師の場合、プロテスタントではどのように行なわれたかについて述べる。筆者が参与できなかった「臨終礼拝の式次第（死去前）」・「臨終後礼拝の式次第」などは省略して註に記しておく¹⁴。ところで、姜元龍牧師の葬儀が始まってから数分後、筆者は、体の具合がわるくなり、最期まで現地調査をすることができなかった。そこで、その詳しい内容は書けないので、普段行なわれるプロテスタント側の「納棺礼拝」や「出棺礼拝」の式次第だけを簡潔に述べる。



写真13

「納棺礼拝」

司会：牧師としての進行者

式辞：人生の最後の道を歩まれる故〇〇〇〇聖徒の納棺を終え、礼拝を捧げます。しばらくの間とどまったこの世を清算し永遠なる天国に行かれることを思い、そして信じつつ、慰めの時間になる事を願い、これより礼拝を捧げます。

1. 黙祷：全員

たとえ、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざを恐れませんが、昨日も今日も永遠に私と共におられる父なる神よ、故姜元龍牧師の納棺礼拝を捧げます。あなたが共におられ、

人生の最後を歩む道を主が明るい光で照らして下さい。イエス様の御名によりお祈りします。
アーメン。

2. 賛美歌：543番（全員）

3. 祈祷：教会代表

納棺礼拝は教会として参加するので代表格となる長老や副教役者が行なうのが好ましい。

4. 聖書奉読：箴言27:1（牧師）

5. 説教：一日のことも分らないような人生（担任牧師）

6. 祈祷：進行者 7. 賛美歌：545番（全員）

8. お知らせ：明日の葬儀を伝える（進行者） 9. 祝祷：進行者

「出棺礼拝 式次第」

午前〇〇時

司式：「天国で会いましょう！」（牧師）

1. 式辞：司式牧師 2. 黙祷：全員 3. 賛美歌：295番（全員）

4. 祈祷：〇〇〇長老 5. 聖書奉読：「黙示録22:1」（司式牧師）

6. 説教：「わが故郷へ向かう道」（司式牧師） 7. 祈祷；司式牧師

8. 略歴紹介：〇〇〇長老 9. 弔辞：〇〇〇長老 10. 弔電披露：〇〇〇長老

11. 遺族挨拶：長老 12. 弔歌：全員

13. 賛美歌：290番（全員） 14. 祝祷：牧師 15. 出棺



写真18

「納棺礼拝を捧げる様子」

礼拝後、参列者はきちんと立ち並び、棺が霊柩車に運ばれる後について行く。進む順序は故人の遺影・司式者・花輪・棺・喪主・遺族・弔問客である。

先導車には故人の遺影と司式牧師を霊柩車に乗せる。喪主と遺族は棺を乗せた霊柩車と一緒に

に乗る。葬儀礼拝では礼拝式次第を作り、それにそって礼拝を進行し、場合によっては教役者が、葬儀礼拝の開始から終了まで敬虔に携わる。

おわりに

「多宗教社会」である韓国における喪・葬礼に関する研究は、故人と関連のある人びとが行なう全般的な儀礼過程を理解しなければならないと思った。それは、「死」や葬送儀礼の過程を理解しなければその内在的意味を明らかにすることはできないからである。

さて、地域に暮らす人びとが葬礼を執り行なうにあたり、彼らが行なう儀礼と儀礼的行動、霊魂と墓所などは、地域と家柄、学問の系統、階層などによって、「死」の意識と葬儀をどのように定義するかという問題と緊密に結びついている。それで、筆者は本論文を通して、21世紀に入って他界した金壽煥枢機卿に見るカトリック、姜元龍名誉牧師に見るプロテスタントの「死」の意識と葬儀を順次考察してみた。その結果、最近のカトリックやプロテスタントの宗教の「死」の意識や葬送儀礼それ自体を学んだわけである。

一方、キリスト教の信者は、「死」に臨む態度をどういうふうにして守って行くことがいいかについて考えた方がよいだろう。前述した桑田（1968）は、同書を通して、キリスト教信者は、人生の最後に来る自分の死にいかなる態度で臨むのであるかについて述べている。

いよいよ生の終焉であることが分った場合、『聖書』を読んでもらうのもよく、讚美歌を歌ってもらうのもいい。〈中略〉一番大事なことは、この最後の時の神の前にひれ伏し、キリストの救いによって罪を赦され、死の棘を取り去られ、心の平安をもって自分の地上の生涯を神に感謝し、そしてきたるべき世界における永遠の生命の希望を確信している、謙虚にそして厳肅な心をもって地上の生涯から彼岸に移る最後の一線を突き進むべきであると思う¹⁵。

とある。

筆者は、以上の桑田の引用文のなかにキリスト教の「死の意識」をはじめ、キリスト教の「死」を巡るあらゆるものが内包されていると思う。そこで、以上のような考察をすることによって、現代韓国のキリスト教の2大既成宗教、すなわち、カトリックやプロテスタントにおける名高い金壽煥枢機卿や姜元龍名誉牧師の事例を中心とした「死」と葬送儀礼をなるべく臨場感のあるように述べてみた。したがって、本論文を記したことによって、筆者のキリスト教に関する研究の収穫となり、後学へのキリスト教に関する「死」と葬送儀礼の1つのモデルになればと思う次第である。

参考文献

『聖書』（1991）、「詩篇」、21-33、日本聖書協会、840頁など参照

『聖書』（1991）、「創世記」2章、4-17、日本聖書協会、2頁など参照

池上良正（2007）、『近代日本の民衆キリスト教—初期ホーリネスの宗教学的的研究—』、東北大学出版会、9頁など

グレンニス・ハワース (Glennys Howarth)、オリヴァ・リーマン (Oliver Leaman、2007)、孝野良夫・武井摩利訳、『死を考える事典』、東洋書林、151頁参照
桑田秀延 (1968)、『キリスト教の人生論』、講談社、53-54頁

註

- ¹ グレンニス・ハワース (Glennys Howarth)、オリヴァ・リーマン (Oliver Leaman、2007)、孝野良夫・武井摩利訳、『死を考える事典』、東洋書林、151頁参照
- ² 池上良正 (2007)、『近代日本の民衆キリスト教—初期ホーリネスの宗教学的的研究—』、東北大学出版会、9頁
- ³ 池上良正は、これら「実態研究」と「理念研究」との関係性を「主張されている宗教」対「生きられている宗教」と言い替えることができると慎重に述べている。(上掲書、9頁)
- ⁴ 金壽煥の母親である徐 (ソ) ジェンハは貧しい陶磁器商人の金ヨンソクと出会って結婚し苦勞の多い生活を送ったが、子供たちの前では決して弱音を吐く姿を見せなかったという。金壽煥の両親は8名の子供が全員カトリックの聖職者になることを望んだが、4番目の兄の金ドンファンと金壽煥だけがその夢を叶えた。軍威普通学校1年在学中に父親が亡くなったが、母親は「父親のいない子供とすることで負い目を持つな」と言って息子たちを厳しく育てた。しかし金樞機卿は生前を回顧して「母は子供たちの教育には厳しかったが、食べる物と着る物はまるで裕福な家庭のようにしてくれた。その代り贅沢などと言う物は無く、更には飴や菓子などの間食も食べられなかった」と回顧している。
- ⁵ 金壽煥は神学大学の留学生時代に兄である金ドンファン司祭が死没した釜山広域市のボミル聖堂を訪れ、司祭として初めて聖堂付設の保育園で働いていた頃、時々司祭館の雑務を手伝っていた女性から結婚を申し込まれたこともあったそうである。
- ⁶ そもそも、朴正熙元大統領は、特別な宗教を信じていなかったが、性向は仏教的な考え方を抱いた。金壽煥が18年間自分の国の大統領として韓国を支配した故人の朴正熙についてそのように述べたのは、伝道の目的であったのか、あるいは独裁者としての人物を醜い心情で言ったかについては、筆者として検討がつかない。
- ⁷ 金壽煥は教会が共同戦線を張るには溥儀との妥協を拒否しなければならないと主張し、彼の思想は維新体制のもと弾圧を受けていた民衆と知識人の人権のために使われた。特に1980年代の民主化運動において金壽煥は大きな影響を及ぼした。その結果、韓国天主教会は政治的に多くの苦難を味わったが、大衆にとって天主教会がさらにみじかに感じられる契機になったという。
- ⁸ キリスト教の「復活節」以前に行なわれる40日間の齋期を指す。
- ⁹ 以上の内容の一部は韓国カトリックの「平和新聞」の記事を参考したことを記しておく。
- ¹⁰ 『聖書』、詩篇、21-33、日本聖書協会、1991、840頁
- ¹¹ 上掲の『聖書』、創世記2章、4-17、2頁

¹² 上掲の『聖書』、創世記2章、17-19、2頁

¹³ 桑田秀延（昭和43）、『キリスト教の人生論』、講談社、53-54頁

¹⁴ 「臨終礼拝の式次第（死去前）」

1. 黙祷

黙祷時、安堵感を与えるように聖書のみことばを奉読する（ヨハネの黙示録21:1、Ⅱテモテ2:13、Ⅱテモテ4:7-8、詩篇39:7）。

2. 賛美歌：全員

3. 祈禱：教会員代表者

参列者の中から代表者が祈る。長くなりすぎないように、家族の心が安らかになるように祈る。

4. 神のみことば：引導者

5. 説教：進行者

家族の心を落ち着かせつつ安堵感を与えるようにことばを伝える。説教は早めに終わらせるのが好ましい。

6. 祈禱：進行者

7. 賛美歌：全員

天の御国への希望が溢れる賛美歌を選ぶ。

8. 祝禱（主の祈り）

「臨終後礼拝の式次第」

礼拝進行：進行者

1. 式辞

神様の召しを受け先立たれた故姜元龍牧師の臨終礼拝をこれより捧げます。敬虔な気持ちで礼拝に臨むようお願い申し上げます。

2. 黙祷：全員

生死禍福を司られる父なる神が、故姜元龍牧師をこの地に遣わされ、20数年間荒れたこの世の中で旅人として生き、神の召しを受けられました。故人は神の御胸にお入りになりました。残された遺族には慰めを与え、悲しみを取り去り、希望をお与えください。険しいこの世で力いっぱい生きられるようにして下さい。この礼拝が神様に届く礼拝となりますよう願います。アーメン。

3. 賛美歌：天の御国の希望を与える賛美290番、292番、295番

4. 祈禱：弔問者より代表

5. 聖書朗読：Ⅰデサロニケ4:13-18、黙示録1:9-17、ヨハネ14:1-6

遺族は悲しみに浸っている。天が崩れるかのような気持ちで礼拝を捧げる遺族に、新たな力を与えられるような慰めのみことばで導く。

6. 祈禱：引導者の切実なる祈り

7. 賛美歌：涙をぬぐうような希望の賛美

8. 祝祷・主の祈り

遺族は突然の出来事に悲しみに暮れている。どうすればいいのかわからない状態。

そのため、礼拝後には葬儀準備のために遺族と落ち着いて話し合う。

¹⁵ 桑田秀延の前掲書、55-56頁

写真説明

写真1 故金壽煥枢機卿の遺影

写真2 2009年2月16日、善終した故人の「明洞聖堂」の祭壇

写真3 「明洞聖堂」の室内

写真4 故人のためのプラカードとカトリックの聖職者墓域に向かうため準備された霊柩車

写真5 A-E 故金壽煥神父の追慕写真展示会が2010年7月2日から18日まで釜山市民会館ハンソルギャラリーで開かれ、筆者は7月5日同場所で撮影した。多い写真の中で5枚だけ選んで紹介する。生前会えなかった故人の人柄をこれらの写真を通して知ることができた。

写真6 故人の神学校時代（右）

写真7 イタリアの首都ローマの教皇庁で故人は韓国人として最初の「枢機卿」の資格を受与された。

写真8 故人の「70歳の祝賀宴」で出会った仏教の法貞高僧と共に。

写真9 金壽煥神父の70歳の誕生日を祝う各宗教界の人びと（真ん中は法頂（ポプジョン、1932-2010）高僧であり金壽煥神父と握手している。左には円仏教の朴清秀（パク・チョンス）教務の笑顔がみえる）

写真10A、B 明洞聖堂の室内に安置された故人の遺体とその前で祈祷する修女たち

写真11A-D カトリックの「聖職者墓域」に安葬された故人の墓

写真12 「聖職者墓域」の入口にたてられた案内板。

写真13 故如海（ヨヘ）姜元龍（1917-2006）名誉牧師の遺影

写真14 2006年8月17日に他界した祭壇のなかの故人の遺影

写真15-A、B キョンドン教会の外観と室内

写真16 生前、金壽煥神父らと共に「6大宗教会議」に参加する故人

写真17 故人の祭壇と弔問客

写真18 キョンドン教会の室内に安置された故人の遺体

地図説明

地図1 明洞聖堂 (<http://g.co/maps/uphgu>)

地図2 キョンドン教会 (<http://g.co/maps/bv8de>)